

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

音痴を治す (2)

音痴に【仮性音痴】と【真性音痴】があります。一定の条件の下でそうなるのを【仮性音痴】と呼び、何を歌ってもそうなるのを【真性音痴】と呼びます。

【仮性音痴】は非常に高い確率で改善されますが、【真性音痴】の場合はその原因を 入力系、処理系、出力系にわけて考える必要があり、その治療も可能性の高いものから絶望的なものまであります。

我々が生まれて初めて聴く音楽が日本音楽(演歌を含む)の場合かなり高い確率で記憶再生が可能です。しかし、それがアフリカの微分音階を使ったものや中近東の音楽である場合、再生はおろか記憶さえも危ないでしょう。この場合そのような音楽に対して【仮性音痴】になったと考えられます。

これは人間が「学習」という形で「経験」の結果を記憶しますので、「未経験」や「非経験」な対象に対して「学習の結果＝スキーマ」が無いと、「わからない」と言う状況に追い込まれるためだと考えられます。

典型的なスキーマの一つに「音階スキーマ」というものがあり、4～5才までに鍵盤やフレットを固定した楽器を学習することで鍵盤やフレットに対応した固定音を記憶したものが「絶対音感」であることを既に説明してきました。

この絶対音感形成以前に「音域スキーマ」が形成されることはあまり知られていません。

人間のピッチ感覚は ゾーンで感知される場合と スポットや ポイントで感知される場合があります。ゾーンの例としては「あの声は女性だ」とか「これはコントラバスの音」などの判断に用いられる「音域」を特定する感覚です。形容詞で言うなら「高い」とか「低い」と表現される「非音階型」ピッチ感覚です。

それに対して絶対音感を頂点とする「音階型」ピッチ感覚は「音階スキーマ」の形成を絶対条件とするより高度なピッチ感覚です。

音痴の大部分が治療可能な「音階不適応型」なのですが、それが「音域不適応型」の場合ゾーンの認知を訓練してやらなければなりません。

さて、このような音痴の治療の第1段階はこの「非音階型」ゾーン・ピッチ感覚の形成から入ります。これはかなり重症に見えるクライアントでも比較的簡単にクリアできる段階です。

シンセサイザー(昔のアナログ型なら一層良い)にもし

「ホワイトノイズ」と「ピンクノイズ」の出力があればそれを利用します。ホワイトノイズと言うのはあらゆる高さ(ピッチ)の音を含むノイズで、そのエネルギーがあらゆる周波数に対して等しい(どの周波数帯も振幅が同じである)という、「高い」感じの「シャー」というノイズのことです。

それに対して「ピンクノイズ」というのはあらゆる周波数帯のオクターブあたりのエネルギーを一定にしたもの(周波数が二倍になれば振幅は半分)で「ザー」と言う「低い」感じの音です。

この二つの音を区別できるかどうかが第一関門です。手元にシンセサイザーや発信器が無い場合は、テレビの放送されていない空きチャンネルのノイズを録音しても使えます。あまり厳密ではありませんが、VHF(1～12ch)の場合ピンクノイズ、UHF(13～60ch)の場合ホワイトノイズに近いものが得られるでしょう。

このテストでは全周波数帯に対する感度や反応を知ることができます。但し低周波の完全な再生を望むなら30cm以上のスピーカーが理想です。

このテストのオプションは2種類のノイズの音量を変えることです。しばしば「大音量＝高い」「小音量＝低い」という誤ったスキーマを持った人がいるからです。確かに「声高に話す」人は「大音量」ですし、「ぼそぼそ話す」人は「低音で小声」です。しかしこのような状況的スキーマが音楽的スキーマに対して有害であることは予想できますので、色々な音量に対して正しく判定できるように訓練しなければなりません。

もう一つのオプションは「音色」によるトレーニングです。よく訓練された耳を持つピアニストでもファゴットの音を1オクターブ高く(低く)聴音することはよくあります。ピアノでは間違えないのに何故そうなるかと言えば、その音に含まれている「倍音」に過剰反応したためであると考えられています。

「ホワイトノイズ」は強い高周波成分を含んだ音ですから、これを認識できれば「含まれている音」と「基本成分の音」を区別して考えられるようになります。

ハイテクではありませんが、音源の倍音をコントロールできる装置にどんなオーディオにもついている例の「トーンコントローラ」と言うのがあはずです。同じノイズを使って広域や低位域の量を変化させましょう。その後でファゴットの音等で同じ体験をさせましょう。